巻頭言

# コロナ禍における看護研究

2020 年に世界規模で COVID-19 の感染が広がって以来，今もなお人々の健康や日常生活に様々な影響が及んでいるコロナ禍の中,「看護は実践の科学」という言葉の意味と重要性を様々な観点から再認識させられています.

再認識させられていることの１つ目は看護教育の中でも実践に直結する看護学実習の重要性についてです．臨地実習が学内に置き換わることが多い中，教員は学内での実習方法について様々な工夫を行い，効果的な学内実習の在り方を研究しています．しかし，対象者に直接関わらない実習で，学生が就職後クライエントファーストの観点をどれだけ実践できるようになるのでしょうか．客観的な評価は今後看護師のキャリア形成における臨床研究での成果を待つ必要がありますが，実践の科学としての質の低下が生じないよう，さらなる実習の工夫をしていく必要があるでしょう.

2 つ目は実践の科学としての看護研究の在り方への影響についてです．クライエントを対象とした研究にしても，ケアする側の医療者を対象とした研究にしても，感染予防を視野に入れた調査方法の工夫が必要とされ，面接調査は対面ではなくオンライン面接が，質問紙調査は Web 調査が主流になってきています．これらの調査方法の相違が研究結果に多少なりとも影響を及ぼすことは，考察の際や論文のクリティーク上でも考慮していく必要があるように思われます.

本学看護学部の教員達もコロナ禍の影響でなかなか研究が進まない中，前回のジャーナルが 1 年ぶりの発行となり，今年度も何とか継続してジャーナルの刊行ができました．コロナ禍で大変な状況の中，研究を継続し続け発表に至った先生方に敬意を表したいと思います.

2012 年にノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥氏は「高く飛ぶためには思いっきり低くかがむ必要がある」という名言を残しています．ジャーナルに発表された内容は最善ではないかもしれませんが，一番高い状態を目指す上でどのプロセスにある研究成果なのかを見極め，研究の深みと幅をさらに広げていってほしいと思います．また，研究途中でまだ発表に至っていない先生方も次の機会に是非その成果を報告していただけることを期待しています.

2023 年 3 月

広島国際大学　看護学部学部長　　山崎　登志子